

Title	中国語内部の多様性とSFC中国語教育
Sub Title	The internal diversity of Chinese language and Chinese education
Author	嚴, 馥(Yen, Lisa)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2020
Jtitle	Keio SFC journal Vol.19, No.2 (2019. ) ,p.140- 152
JaLC DOI	10.14991/003.00190002-0140
Abstract	中国語内部の多様性が現実である以上、SFC中国語教育はそれを無視すべきではない。今後のSF C中国語教育のデザインの土台として、本論文では海外研修プログラム(台湾)に参加したSFC生を通じて得られた現状について考察した。中国語内部の多様性は学習に混乱を起こし、現地の人々と深く交流しない限り、自力的に多様性を感知し、人々の考え方を深く理解することが難しいことが分かった。初級の段階で中国語の多様性への意識を芽生えさせる研修前後のサポートが欠かせないと考えられる。今後、海外研修(北京)参加者と長期留学者も含めて更なる考察を進めたい。
Notes	特集 多言語多文化共生社会に向けた挑戦 招待論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1902-0140">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1902-0140</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

[招待論文]

# 中国語内部の多様性と SFC 中国語教育

## The Internal Diversity of Chinese Language and Chinese Education

嚴 馥

慶應義塾大学総合政策学部専任講師

Lisa Yen

Assistant Professor, Faculty of Policy Management, Keio University

**Abstract:** 中国語内部の多様性が現実である以上、SFC 中国語教育はそれを無視すべきではない。今後の SFC 中国語教育のデザインの土台として、本論文では海外研修プログラム(台湾)に参加した SFC 生を通じて得られた現状について考察した。中国語内部の多様性は学習に混乱を起し、現地の人々と深く交流しない限り、自力的に多様性を感知し、人々の考え方を深く理解することが難しいことが分かった。初級の段階で中国語の多様性への意識を芽生えさせる研修前後のサポートが欠かせないと考えられる。今後、海外研修(北京)参加者と長期留学者も含めて更なる考察を進めたい。

The diversity of Chinese language should not be ignored in Chinese education. Students who participated in the study abroad program in Taiwan were interviewed. Their stories show that diversity confused them in learning Chinese. It was hard for them to be aware of diversity and think from different perspectives without deep interactions with local people. Therefore, it is crucial to provide them support before and after the study abroad program to help them to be aware of diversity. The future task would be to observe students who participated in the study abroad program in Beijing and long term study abroad programs.

**Keywords:** 中国語教育、中国語内部の多様性、海外研修プログラム  
Chinese education, diversity of Chinese language, study abroad program

### 1 はじめに

本論文では「中国語内部の多様性」と「SFC 中国語教育」の関係について考察する。筆者はインテンシブ中国語コースを担当し、中国の標準語の「普通話」を教えているほか、スキル「台湾語」も担当し、台湾で使われる方言

---

の一つの台湾閩南語<sup>1)</sup>を教えている。方言の授業を担当することで、2018年に「外国語教育での方言の取り扱い<sup>2)</sup>」をテーマとするスペイン語教育に関する研究発表に参加した。それがきっかけで別々に扱っていた方言と普通話の授業の関連性に注目し始めた。

外国人に中国語を教えることは、一般的に「国際汉语教学、或曰对外汉语教学、一般指在中国国内针对外国人进行的汉语教学、或者在国外对外国人进行的汉语教学(国際漢語教育、もしくは對外漢語教育と呼ばれる。通常、中国国内での外国人向けの中国語教育が海外での外国人向けの中国語教育を指す(于海阔 2012: 32))」ということであり、SFC 中国語教育は後者に属する。《中華人民共和國國家通用言語文字法》第二十条には「对外汉语教学应当教授普通话和规范汉字(對外中国語教育は普通話と規範漢字を教授するべきである)」と明文化されている。「普通話」について、1955年の現代漢語規範問題學術會議<sup>3)</sup>で次のように定義している。「普通話以北方話为基础方言，以北京语音为标准音，以典范的现代白话文著作作为语法规范(普通話は北方方言を基礎方言とし、北京語音を標準音とし、典型的な現代白話文の著作を文法の規範とする)」。一部の地域を除き、海外での外国人向けの中国語教育の大半は、「以普通话作为语言标准，教材编写和课堂教学均以普通话语音、词汇、语法为教学规范(普通話を言語の基準としており、教材の編纂と教室での授業は、全て普通話の音韻、語彙、文法を教学の規範とする)(李泉 2015: 3)」というルールに従い行われている。SFC 生が使っている教材も教室で受ける授業も例外ではない。

《中華人民共和國憲法》第一章第十九条では「国家推广全国通用的普通话(国は全国共通の普通話を普及させる)」と示されている。「普通话是国家通用语，交际范围广，其学习价值最大(普通話は国家公用語であり、コミュニケーションのできる範囲が広く、それを学習する価値が最も大きい)(柳茜・李泉 2017: 116)」というメリットがあるため、中国の言葉と文化を知りたい者にとって、最初に普通話を選ぶのはごく自然なことである。しかし、「汉语历经多年的演变，现在发展成数量众多的方言，大的方言区就有七个，而每个方言区内又可细分多种(中国語は長年の変化により、現在は数多くの方言に発展しており、大きな方言区は七つあり、各方言区の中にあることばは更に数種類に細かく

分けることができる) (于海阔 2012 : 32)」という側面もある。同じ中国語の方言とはいえ、南方の方言と、北方方言を基礎とする普通話の間の違いは、特に語音の違いが極めて大きい。そのうえ、丁启阵 (2003 : 61) は「从地域分布上说, 普通话、台湾所说的“国语”、新加坡的“华语”, 虽然它们的一致性很强, 但也存在不少分歧, 都可以看作是汉语的方言 (地域分布からみれば、普通話、台湾で使われる「国語」、シンガポールの「華語」は一致性が高いものの、相違点も少なくないため、全てを中国語の方言とみなすことができる)」と主張している。そうすると、果たして普通話だけで良いのであろうか。

初期の外国人向けの中国語教育の中では、中国語の多様性がそれほど重視されていなかった。「50～70年代留学生相对较少, 主要集中在北京等少数大城市, 语言环境中的方言问题并不突出 (50～70年代に留学生の数は比較的少なく、留学生は主に北京など少数の大都市に集中したため、言語環境の中の方言に関する問題は目立たなかった) (柳茜・李泉 2017 : 116)」というのが原因である。しかし、近年、留学生の数は次第に多くなり、「以 2016 年为例, (省略) 留学生几乎遍及全国各省市, 但只有 17.44% 的留学生分布在普通话环境最好的北京地区, 82.56% 以上的留学生处在方言区 (2016 年を例として略)、留学生は全国のほとんどの省、区、市にいる。普通話の環境が最もよい北京の周りの地区にいる留学生の割合は 17.44% にしか届かず、82.56% の留学生は方言区にいる) (柳茜・李泉 2017 : 116)」というのが現状である。これは、学生の大半が教室を離れた後に入った本当の言語の世界の様相は多種多様であり、各地方の特色を持つ地方普通話や方言を聞く機会がより多いことを示唆している。そこで、このような現状は「造成了学生出了校门之后出现沟通障碍甚至无法沟通的现象 (学生が学校を出た後、コミュニケーション障害が現れたり、コミュニケーションすらできなかつたりする状況をもたらした) (高永强 2015 : 120)」という結果につながっている。

言葉の学習は畳の上の水練になってはいけない。SFC の中国語の授業で学んだ中国語を、それを使うべき環境で運用してはじめて「真」の中国語に変わる。SFC で中国語を勉強したからには、一度でも中国語の使用地域に行って実際に中国語を運用することが望ましい。しかし、前述の研究結果によれば、海外研修プログラムに参加する SFC 生はほかの留学生と同じように、多様性

---

に富む中国語の世界に入らなければならないし、SFC で習った普通話を使ってもコミュニケーションが難しい状況に直面すると想定しうる。このような状況は、中国語の教育に反映されるべきであるが、中国語の多様性を第二外国語としての中国語教育に反映させるべきか否かに関しては、意見が賛成と反対に二分される。「将方言知识引入教学内容，既不符合“国家通用语言文字法”，在实际教学中也不具备操作可能性（方言の知識を教育の内容に加えると、「国家通用言語文字法」の方針に合わないし、実際に授業で実行するのも難しい）（于海阔 2012 : 33）」という反対派の説もあれば、方言や方言に関する知識を第二外国語としての中国語教育に導入する必要があると主張する賛成派（张振兴 1999、丁启阵 2003、柳茜・李泉 2017 など）の意見もある。導入の意義について、丁启阵（2003 : 61）は「学习者如果能适当掌握一些各区域、各方言的主要特点和常用语言单位，对于扩大他们的交际范围无疑会收到事半功倍的效果（学習者は各区域、各方言の主な特徴と常用の言語表現をある程度把握すれば、彼らの交流範囲を広げることに倍以上の効果をもたらすことに違いない）」と主張している。それに、李珉知（2008 : 213）は「对于外国学生来说，适当地认识方言、了解方言是更快学好中国文化、语言和文学等的捷径（外国人の学生にとって、ある程度方言を把握し、方言を理解するのは、一層早く中国の文化、言語と文学等をマスターする近道である）」と述べている。

使命感を持ち、未来の社会での様々な問題を解決できる人材は、どんな年になっても分野横断的知識を吸収でき、自分を制限させない習慣と勇気を持つ者でなければならない。このような人材を育てるための言語教育は、言語の多様性を避けたり無視したりするべきではない。人々の交流が頻繁になり、異なる言語と文化背景を持つ人々が集まる機会も多くなった。多言語・多文化の共生が重要な課題となる現代社会では、如何に言語と文化の隔たりを越えるかは、一大難問である。異なる文化を有する人々の間に起こった問題をうまく解決するため、お互いの考え方を「深く」理解する必要がある。张振兴（1999 : 43）は「普通话和方言构成了现代汉语，构成了今天的汉语环境，形成了今天的整体汉语（現代中国語は普通話と方言からなる。両者は今日の中国語の環境を築きあげ、今の中国語の全体像を形成した）」と指摘している。つまり、中華圏の人々が使う言葉は普通話だけではない。各地方の話し方の

特色を持つ「地方普通話」を話す者と、日常生活で方言しか使わない者は圧倒的多数である。方言はその地域を解読する鍵と言われている。中華圏の人々の考え方を全面的に理解し、その地域をめぐる問題を解決するためには、普通話のみの理解能力であれば、中国語の世界の一部しか知らないということになる。海外研修プログラムに参加すると、異なる文化を持つ人の行動モデルと自分のとが違うことを直ちに感じられるが、その行動モデルの背後に隠れた相手の物事への捉え方は何か、というところまで理解しないと「真」の理解にならないと思われる。そのため、SFC 中国語教育の中に中国語内部の多様性を反映させる必要性がなおさら高いと考えられる。

SFC の中国語学習者は自分のニーズにより、インテンシブ・ベーシック中国語コースを履修した後、3 週間～1 か月の海外研修プログラムに参加する。インテンシブ 3 期までの履修期間は一年半である。つまり、海外研修プログラムに参加する SFC 生は、海外の第二言語教育としての中国語教育を受け、目標言語の使用地域に短期滞在し、初・中級レベルの学習者となる。その学習者は先行研究の対象とした、中国国内の中国語教育を受ける、長期滞在中・上級学習者とは学習の環境、目標言語の使用地域にいる期間、中国語能力が全く異なる。よって、本論文では、中国語の多様性をどのように SFC 中国語教育に反映させるかという具体的な問題を論ずる前に、今後の SFC 中国語教育をデザインするための土台として、海外研修プログラムの参加者を通じて得られた現状と問題点について考察する。

## 2 研究方法と研究対象

### 2.1 研究方法

海外研修プログラム(台湾師範大学・語言中心)に参加した SFC 生二名に半構造化インタビューで調査を行った。インタビュー時間は 30 分～40 分である。質問事項は次のように示される。

- (1) 海外研修プログラム(台湾)に参加した目的
  - (2) 海外研修プログラム(台湾)に参加する前に履修した中国語の授業
  - (3) 研修時間と自由時間でそれぞれコミュニケーションをした対象と内容
-

- (4) 現地の人と交流した時に感じたこと
- (5) 現地の人と交流した時に「国語」以外の言語の有無
- (6) 現在、台湾閩南語などの方言の存在を知るか否か
- (7) 海外研修プログラムが終わってからの中国語学習の変化

## 2.2 研究対象の選択

SFC 海外研修プログラムは、北京大学と台湾師範大学の語言中心と二つの選択肢がある。普通話在北京方言を基準にして作られたものであり、簡体字とピンインを使う。SFC 生が学んだのも簡体字とピンインなので、学習の面では北京大学の研修と SFC 中国語教育との違いが少ない。一方、台湾と日本の関係は古くから深く、近年民間の交流も頻繁である。台湾に好感を持つ日本人学生は多く、台湾の海外研修プログラムも人気はあるが、台湾では繁体字と注音符号を使い、公的な場で使われる「国語」には台湾閩南語の表現と文法が大量に混ざっている。エスニックグループが多く、多言語・多文化が共存する台湾では、国語、台湾閩南語のほかに、客家語や原住民の諸言語もある。近年、新移民からもたらされた元の国のことばも新しい言語現象とされている。普通話環境がよい北京に比べ、台湾では中国語の内部の多様性が比較的はっきりしていると考え、今回は台湾師範大学の語言中心の海外研修プログラムの参加者を研究対象とした。

### 2.2.1 海外研修プログラムの参加者 A

- (1) 海外研修プログラム (台湾) に参加した時期：インテンシブ 3 期終了後
- (2) 海外研修プログラム (台湾) 終了後の中国語授業の履修状況：  
インテンシブ 4 期  
スキル、コンテンツの中国語関連授業は履修していない
- (3) インテンシブ 1 期終了後、海外研修プログラム (北京大学) に参加した

### 2.2.2 海外研修プログラムの参加者 B

- (1) 海外研修プログラム (台湾) に参加した時期：インテンシブ 2 期終了後
- (2) 海外研修プログラム (台湾) 終了後の中国語授業の履修状況：

インテンシブ3期

インテンシブ4期

スキル台湾語

(3) 海外研修プログラム(北京大学)に参加したことがない

### 3 海外研修プログラム参加者の留学体験

#### 3.1 Aのストーリー

私は、台湾の海外研修プログラムにも北京大学の海外研修プログラムにも参加しました。SFCで中国語の勉強を始めたので、インテンシブ1期が終わってからの夏休みに北京大学の海外研修プログラムを申し込みました。半年間しか学んでいなく、中国に行ったら、言葉が通じなく困った場面が多かったです。北京大学の研修課程は一日中であり、放課後、外で遊ぶ機会はあまりなかったです。しかし、インテンシブ2期が始まったら、同じクラスの人に比べ、聞くことも、話すことも上手で、自分の中国語能力が上がったと強く感じました。その後、台湾の海外研修プログラムに参加した友人に強く勧められ、インテンシブ3期が終わった後に、再び海外研修プログラムを申し込んで台湾に行きました。

台湾に行く前に、台湾で使われる言葉はあまり知りませんでした。入国カードの文字が繁体字なので、早くも飛行機の中でSFCで学んだ中国語と台湾の「国語」の違いを感じました。台湾に来たからには繁体字で記入するべきだと思ったが、なかなかうまく書けなかったです。教科書も繁体字なので、授業の時は大変でした。最初の頃は、最も簡単な文字でさえ認識できませんでした。しかし、それは文字の形の違いだけで、一度覚えたら大丈夫になりました。

北京の海外研修プログラムと違って、台湾の海外研修プログラムの課外の自由時間は比較的多かったです。それに、学校の近くは賑やかで、レストランやお店がいっぱいでした。寮で台湾の番組を見る人と違い、私はよく外でぶらぶらしていました。現地で台湾人との交流を通じて、日常生活でよく使われる言葉を自然習得しました。例えば、何かを注文したら、「“内用(店内)? 外帯(持ち帰り)?”」と毎回同じ言葉が聞こえました。最初は聞き取れなくさ



っぱり分からなかったが、しばらく経つと自分も台湾人のように返事することができました。様々な人と交流はしたが、台湾閩南語などの方言が使われたことに、特に気づきませんでした。ただし、台湾の人が話すときに、舌を巻かず、「儿化音」を使わないことに気づきました。完璧な中国語の発音を求めないし、「儿化音」を使わないほうが話しやすいと思うので、SFC に帰ってから、コミュニケーションに問題が生じない限り、昔のように頑張って「儿化音」を使うことをやめました。

### 3.2 B のストーリー

私は、インテンシブ 2 期が終わってからの春休みに海外研修プログラムに参加し、台湾に三週間ぐらい滞在しました。インテンシブ中国語を始めたことを、台湾で働いた親戚と話したら、台湾に留学に行ったらどう?と言われました。中国語のレベルアップと異なる文化の体験をしたく、台湾の海外研修プログラムを申し込みました。台湾に行く前は、台湾のことをあまり知らなかったです。

研修の始めは大変でした。教科書は繁体字でありピンインもありませんでした。SFC の中国語の授業で頑張って覚えた簡体字は全く役に立たなかったです。最も簡単な文字でさえ認識できませんでした。このままだと学習が進まないと思って、本文を練習した時に、台湾人の先生の発音を聞いて、繁体字を一つ一つ簡体字に変換しました。そして、発音にも学習の問題が起きました。同じ漢字なのに、SFC で学んだ声調と違うので、覚えた声調で発音したらすぐ直されました。

同行の日本人の先輩は、台湾人と交流するグループを作りました。私もそのグループに誘われました。台湾の人と知り合い、休みの時に宜蘭などに遊びに行きました。旅の中で、これまで見たことのない独特な台湾の食べ物を食べて楽しかったです。タクシーに乗った時に、台湾人の友人がタクシーの運転手と話した言葉は中国語っぽくないので、どんな言語を話したかと聞いたら、台湾閩南語のことを教えてくれました。そのグループのおかげで、いろいろな貴重な体験を得ました。

SFC の中国語の授業に戻ってから、台湾の研修で直された発音は、再び普

通話の発音に直され、一時的に頭の中が混乱しました。一方、台湾の友人に台湾閩南語のことを教えられたので、インテンシブ4期の授業が終わってから、スキル台湾語の授業をとりました。

## 4 短期留学の初中級 SFC 生と中国語内部の多様性との関連性

### 4.1 初中級 SFC 生は自力的に中国語内部の多様性を意識することが難しい

方言がわからないことで、食事、買い物、遊びなどの場面でコミュニケーションすることができないということは、Aの話にもBの話にもなかった。現地の人と交流した時に、困難を感じた場面がしばしばあったが、聞き取れない言葉は何か、自分では判断できないと、Aは話した。つまり、方言が原因でコミュニケーションできないという状況があったとしても、中国語能力の不足で、本人が意識しなかった可能性は十分ありうる。そのほか、語言中心は台湾の北部にあり、台湾の中部と南部に比べ、台湾北部の方が方言を使用する割合はそもそも低いのも原因の一つである。「国語」がうまく話せない外国人を相手にしたらなおさら方言の使用を避けるであろう。今回のインタビューの調査結果に限って言えば、短期滞在の初中級レベルの SFC 生は、中国語の能力に限られるため、自力的に中国語の内部の多様性、すなわち、国語と台湾閩南語、ほかのエスニックグループの言語との違いを感知することがなかったようである。言語の多様性を通じ、台湾のことをより深く認識することもあまりできないであろう。海外研修プログラムに参加する前に、方言に関する知識を獲得しないと、言語と文化の多様性が目の前にあっても感知できず、その地域をより深く認識する機会を逃し、海外研修への時間と費用を浪費する結果となりかねない。

ただし、最終的にはAもBも台湾閩南語のことを知り、多様性を持つ中国語のもう一つの様相を見た。Aは、台湾のルーツを持つ親友に教えられ、Bは旅先のタクシーの中で自ら体験した。いずれも台湾の友人に教えられたことがきっかけであった。中国語能力に限られる学習者の場合は、現地の人との「深い」交流が、中国語の内部の多様性への意識を芽生えさせる鍵なのではないかと思われる。ただし、誰もが皆、数週間の短い間で現地の人と知り合い、深い交流を行うことができるとは限らない。そこで、短時間で言語と

---

文化の多様性を通して理解を深めるきっかけを作るため、SFC の中国語の授業に「ヒント」を加える必要がある。SFC 中国語教育では、中華圏の方言、歴史、文化などにかかわる授業は、中上級の段階の強化教育と位置付けられている。しかし、海外研修プログラムはインテンシブ中国語コースと一緒に、初中級の段階にデザインされている。学習の時間差をどのように調整するかは、今後の課題である。

#### 4.2 中国語の内部の多様性は初中級の SFC 生の学習に混乱を起こす

台湾で使われる「国語」では、発音、特に声調が普通話と違うことばが少なくない。例えば、「星期天(日曜日)」の「星期(曜日)」は普通話ではどちらも一声で発音するが、「国語」では「期」は二声である。日常生活に関する表現の違いも多い。「出租车(タクシー)」は台湾では「計程車」と呼ばれる。先生が出した宿題は「作業」ではなく「功課」という。このような微妙な差異は中国語学習の混乱を引き起こした。B が頑張って覚えた単語の発音は何度も直されたし、繁体字で苦労した部分もそうであった。二人とも台湾に行く前に繁体字のことをほとんど知らなかった。いきなり繁体字の教材を見て、それに慣れるまで少し時間がかかった。最初の頃は、ひたすら繁体字を簡体字に「訳した」と、B は苦笑いしながら話した。「厂」と「廠」に示されるように、形の違いだけなので、一度覚えたら問題解消という程度の学習困難である。授業が進むにつれ、繁体字による学習の困難が次第になくなった。しかし、前もって少し勉強しておけば、研修の最初の頃はそんなに大変ではなかっただろうと、二人は異口同音に言った。

方言の学習と中国語能力の関係について、柳茜・李泉(2017: 122)は「高級汉语水平者, 方言接触和学习对普通话水平的影响是正向的, 汉语学习和综合汉语能力的提高, 一些学习者甚至能利用普通话来跟当地人学习方言(中国語上級学習者にとって、方言に接触したり学習したりすることは、普通話の能力にプラスとなり、中国語学習と総合中国語能力の向上につながる。一部の学習者は普通話を使って現地の人に方言を習うこともできる)」と述べている。しかし、初級の段階ではこの傾向は真逆である。初級中国語学習者の学習状況から、「方言接触和学习对普通话的影响是负向的(方言の接触と学習は

普通話に負の効果をもたらす) (柳茜・李泉 2017 : 122)」という結果が観察された。中国語の多様性による学習困難を軽減するため、海外研修プログラムに参加する前にある程度関連知識を学ばせ、海外研修プログラムの参加者や、研究や起業などで繁体字の知識を必要とする SFC 生には「识繁写简(簡体字を書くが、繁体字が読める)」という中国語の学習を導入するべきだと思われる。そして、海外研修プログラムに参加した後のフォローも欠かせないと痛感した。中国語の内部の多様性は「話す」、「聞く」という側面で多く反映されると予測したが、台湾の海外研修プログラムでは意外にも「読む」、「書く」という側面に多く反映されていた。台湾では、国語と台湾閩南語の混同の現象は普遍的であり、日常会話はもちろんのこと、ニュース、新聞、雑誌などのメディアにも頻繁に現れる。台湾閩南語に由来することばの意味がわからないと、話の内容をうまく理解できない可能性は十分ありうる。しかし、今回の海外研修プログラムの参加者は短期留学中にテレビ、新聞、雑誌などにあまり触れなかったため、メディアを通して中国語の内部の多様性を感知したこともなかったのである。

#### 4.3 短期留学終了後の初中級の SFC 生の変化

中国語の内部の多様性は、初中級レベルの SFC 生に学習の困難をもたらしたが、普通話と異なる中国語の別の側面を拒む現象は、二人とも見られなかった。A は「国語」と普通話との間に言葉遣いと発音の違いがあることを知ってから、その現象が「面白い」と感じ、中国語を話す時に使える表現が増えてよかったと思った。そして、完璧な発音で中国語を話さなければならぬとも思わないので、台湾の海外研修が終わった後、「儿化音」へのこだわりから解放され、SFC の中国語の授業で先生に直されない限り、意識的に標準語に近い発音をしなくなった。一方、B は、台湾の海外研修から帰ってきてから、一時的に学習の混乱が生じたが、その後、スキル台湾語の履修を選択した。学習の混乱は、中国語への排斥心理にならず、更なる学習の動機につながり、台湾のことをより深く理解しようとする意欲がみられた。

## 5 まとめと今後の課題

中国語の内部は多元的であり、普通話だけでなく、各地域の地方普通話と方言も存在するのが現状である以上、SFC の中国語教育はこの客観的な現実を無視することはできない。本研究では、台湾の海外研修プログラムに参加した SFC 生のインタビューの調査結果を通し、中国語の内部の多様性は、初中級レベルの SFC 生に学習の混乱をもたらしたし、中国語能力の制限のため、現地の人との交流を深めない限り、自力的に多様性を意識することが難しいことがわかった。海外研修プログラムに参加する前と後のフォローが大事なことはわかったものの、何を、どのくらい現行の中国語教育に反映させるか、なかなか決められない。この点に関しては、于海阔 (2012 : 33) は「中国这么多方言，你让他学哪个？别说外国人，就是中国人到了广东和上海，有几个人能听懂当地的方言？现代社会很少有人在一个地方待一辈子，这个月上海话刚学一点，下个月去广东，再下个月又去厦门，难道让人家把各地方言都学一遍？（中国にはあれほど多くの方言がある。学習者にどれを学ばせるのか？外国人どころか、広東と上海に行った中国人でも、どれぐらいの人が現地の方言を聞きとれるのか？現代社会では、同じ場所を一生離れない人が少ない。今月は少し上海語を学んで、来月は広東、再来月はアモイに行く必要があるなら、まさか全国各地の方言を制覇しろというのか？）」と述べている。中国国内の中国語教育に方言を導入する場合は、現地の方事情だけ考慮すればよいが、海外の中国語教育に携わる筆者にとって、まさしく于海阔 (2012) が述べた通り、膨大な数の言語を目の前にして、学習者にどれを学ばせるのか、と複雑な気持ちになってしまう。その上、全国各地からきた中国語教員は、出身地以外の方言を教えられないことも考慮しなければならない。そこで、普通話の授業で特定の方言か、方言に関する知識を部分的に導入することは、まだ検討の余地があるが、学習者に特定の方言を流暢に話させることは理想に近い。しかし、「中国語の内部は単一ではなく多元的」ということを伝えて意識させることは重要である。中国語の内部の多様性を知り、そこから異なる文化の存在と共生、異なる文化を持つ人々の考え方の違いを理解することは、「真」の異文化理解であり、諸問題解決の土台でもある。

今回の調査を通し、中国語の内部の多様性と SFC 中国語学習者との関連性を窺い知ったが、調査対象が足りないため、海外研修プログラムの参加者のケースを増やし、北京大学の海外研修プログラムの参加者と長期留学生も含めて考察することを今後の課題とする。

## 注

- 1) 台湾の公用語は「國語」、別称「台灣華語」であり、文字、語音、語彙などのあらゆる面で普通話と不一致することが多い。多言語・多文化の台湾では、「國語」のほかに「台湾閩南語」も存在する。これは人口の70%以上を占めるエスニックグループが使う言語であり、その源は福建省(略称「閩」)の南部の方言である。福建省の泉州や漳州で使われる閩南語は台湾海峡を越えて、台湾島内で接触、融合した後、「台湾閩南語」という新しい変種が生まれた。
- 2) 益田健太「外国語教育での方言の取り扱い—日本におけるスペイン語教育のケーススタディと展望—」(2018年5月23日 於: λ 407)
- 3) 许宝华「现代汉语规范问题学术会议」『语言文字周报』(2005年3月30日第4版)

## 引用文献

- 丁启阵 (2003)「论汉语方言与对外汉语教学的关系」『语言教学与研究』(6), pp. 58-64.
- 高永强 (2015)「方言语境下的对外汉语教学」『语文学刊』(3), pp. 119-120.
- 李珉知 (2008)「汉语方言与对外汉语教学的关系」『高教高职研究』, pp. 212-213.
- 李泉 (2015)「国际汉语教学的语言文字标准问题」『语言教学与研究』(5), pp. 1-11.
- 柳茜・李泉 (2017)「方言接触对留学生汉语学习影响实证研究—基于兰州高校的调查」『语言文字应用』(3), pp. 115-124.
- 于海阔 (2012)「普通话和方言在国际汉语教学中的定位」『宁夏大学学报(人文社会科学版)』34 (3), pp. 32-35.
- 张振兴 (1999)「方言研究与对外汉语教学」『语言教学与研究』(4), pp. 42-49.
- 中国政府门户网站 (2005)「中华人民共和国国家通用语言文字法」[http://www.gov.cn/ziliao/ffg/2005-08/31/content\\_27920.htm](http://www.gov.cn/ziliao/ffg/2005-08/31/content_27920.htm) (2019年9月30日アクセス)

[受付日 2019. 9. 30]